



## 研究人生—そのデモニッシュなる旅

兼松 秀行



大学4年生の時に研究らしきものを初めて以来、思い起こせば30年近い歳月がたちました。研究者としてよちよち歩きを始めた頃のことを、つい昨日のように思い出します。皆さんもきっとそうだと思うのですが、私も研究者にあこがれて、あこがれたとおりの道を歩いている、ほんの数パーセントの幸せな人間です。そのことをいつもうれしくまた誇りに思っています。30年前に抱いた、研究者として大成したいという燃えるような願いは、今も変わらず心の中に、汲めどもつきぬ情熱として消えることなく燃え続けています。しかし、振り返りますと4半世紀以上の長きにわたる研究人生の中にはいろんなことがありました。当初思いもしなかったようなことにずいぶんたくさん遭遇して、挫折をしたり、立ち上がることもできないくらいにくじけそうになったりしたこともありましたが、こうして今も変わることなく情熱を燃やし続けることができているということは、例外的に幸せなことなのだと思います。今静かに目を閉じますと、いろんな場面が思い浮かんできます。私は30代半ばくらいまで、転勤を2回経験して三つの職場で働くことになりました。ずっと同じ職場で続けて仕事をすることができた人とは異なり、根無し草のような自分の現状と将来に不安を感じたこともありました。また30代前半から父親が病気がちになり、母をサポートして病床の父親を励ましながら研究生活を送った時期もありました。それは15年ほど続いて、何度か繰返された父の危篤と講演予定の変更を余儀なくされたこと、還らぬ旅となることがわかっている父を残して、後ろ髪を引かれる思いで国際会議へと旅立たなければならなかったこと、ついには父の最期に居合わすことができず、講演をすべて終えて緊急帰国して葬儀を執り行ったことなど、今となってはすべてが、映画の中のシーンのように、心に残る思い出となっています。上司とそりが合わずに、悔しい思いをしながら一人黙々と実験装置に向かった日々、今にも最後の時を迎えそうな父親の枕元で、不安と恐怖心と戦いながら締め切り間際の論文を書き続けた夜のこと、家内の入院、自らの入院、命拾いをしながらベッドの上で研究の新たな展開の構想を練ったことなど、次々と走馬燈のようにいろんな出来事が浮かんできますが、今思うと、これらすべてが血となり肉となって今の自分があるように思います。そして、そういった悲しみや苦しみを乗り

越えて研究を続けてきたことが、歩き出した頃には想像もつかなかったようなたくましい研究のプロフェッショナルへ、そして戦士へと自分を仕立てあげていくことになったのだと感じています。

研究というある種デモニッシュなものに魅せられて、こうして歩いてきた私ではありますが、研究生生活に必要と考えていることが三つあります。自分がこれまで折々に書いたものを見返してみても、表現こそ多少違ってはいますが、ずいぶん若い頃からこういった考え方をしていた、それが研究の道を歩むにつれて今から紹介する明確な形をとってきたように思えます。以下にそれを紹介して皆さんと共有したいと思います。それが若い方々の参考になればと心から願っています。

その一つは“ゼロベース”という考え方です。私のゼロベースは、いつもスタートラインに立つような気構えでいると言うことを申しております。“謙虚であれ”ということはよく恩師や諸先輩に言われたことではありますが、なかなかその意味を本当に理解して実行することは難しいです。それは心の中に思ってもみないようなへりくだりをしたり、いわゆる“謙遜”をすることではありません。いい結果が得られたり、講演や論文発表がうまくいったとき、そんなときは思いっきり得意になったらいいと思います。自らを偽らず“ユーレカ”の瞬間には思いっきり喜びに浸って小躍りしたいものです。それなくしては次の前進はありませんから。しかし、大事なことは“ユーレカ”の次の瞬間から、またスタートラインにたった気持ちで歩き出すことだと思います。これは言うのは簡単ですが、長年にわたってその通り実行することはなかなか難しいことです。しかしそういった心構えが本当の意味での謙虚さを実現するものであり、長い年月を通しての研究活動を保証するものだと思います。

二つ目は“ボーダーレス”です。この言葉もいろんな意味で使われますが、私がここで申し上げる意味は、自分のその時々分野を超えて学際へ、異分野へと自分の専門を広げていくことです。創造性教育というのが、私の高等教育機関における教育活動としてのライフワークなのですが、そういった調査と研究の中で、創造的な人間は“境界を移動する人”であるということが次第にわかってまいりました。これはどういうことかという、私が初めて考えついたことではありませんが、次のよう

なことから、私たちの学問体系は多くのシンボリックドメインから成り立っています。生物、化学、情報、材料などなど、これらは伝統的に作り上げられたいわゆる“分野”ですが、それは伝統的なシンボリックドメインととらえることができます。しかし学問の究極の目的は新しい価値の創造であり、これらのドメインを融合したり消滅させて、新しいシンボリックドメインを作り出すことにあります。そのためには、ドメインの境界（バウンダリー）を飛び越えることがどうしても必要になります。それこそが学問の創造なのです。私の言う“ボーダーレス”はバウンダリーを飛び越える勇気です。それは異なるドメインに完全に飛び移ることではなく、今いるドメインとまたがってその融合をはかることなのです。その意味では私がいくつか勤務した職場の中にはそれが制度上難しいところがありました。現在勤務する国立高等専門学校は制度的にも分野や組織の壁が低く“ボーダーレス”であることがとても容易であって、その点創造的な仕事がしやすい環境であったように思います。私は別の場所で、自分の研究ポリシーとして、“異分野間ネットワークング”を提唱したことがあります。これはどういうことかと言いますと、私の場合を例にとって説明いたしましょう。私の専門は材料工学ですが、現在主要なテーマにしているのが三つあって、そのうちの二つが皆さんの多くと関係のある生物工学に関連したテーマです。一つは“抗菌材料の開発研究”です。これは抗菌特性を材料の表面に付与することによって、抗菌材料を作り、それによって食品機械加工関係をはじめとする各種産業の発展に寄与しようという試みですが、私はバックグラウンドとして微生物の知識を持ちませんから、その展開、推進にはそのような知識を持った人とのパートナーシップが不可欠です。幸い私の勤務する鈴鹿高専には細菌学者がいて、ご一緒することとなりましたが、おかげさまでその研究はずいぶんと進み、5年ほどになりました。皆さんの関心をいただくようになって参りました。またもう一つのテーマもこれは生物工学に関係して、金属材料が環境に与える影響を評価する一端として、細胞毒性を評価する研究ですが、これも細胞を取り扱うスキルと学問をしなかったために、パートナーを必要としました。これも幸い本校にお迎えした研究者の中にその専門家がいて、チームを組んで未だ歩き出したばかりですが、その今後の展開に大きく期待をふくらませているところです。こういったことはボーダーレスという考え方から導かれる展開ですが、新しいことを始めるためには欠かせないことだと思います。それが人によってできたりできなかったりというような、個人

の性格依存ではなく、システムとしてできるように組織を設計することが、こういった変化の激しい時代にとっても大切なのではないのでしょうか？ 高専においてそれが容易であることを申し上げましたが、一方大学においても新しい制度作りをお考えになる場合は、是非そうした横の壁を廃して、と完全にはいかないまでも、低くしてでもよろしいですから、融合・分裂といったドメインの変化にフレキシブルであるような設計をすることが、新しい時代に適合して生き残っていくために望ましいのではないかと、私個人は強く感じています。

三つ目は“寛容さ”です。もちろんそれは何でも我慢するとかいい加減で妥協するという意味ではありません。違いを誇りにし、そしてお互いの違いを評価し合うということです。私たちは皆それぞれがとても違っています。出生、歴史が違うのでそれは当たり前のことです。大事なことは、違いを攻撃しあって排除するのではなく、お互い一歩進んで積極的に肯定し認め合い尊重し合うことなのです。そこに本当の意味での融合があり、協力があり調和があります。分裂の20世紀が終わり、21世紀は融合と統合の時代と思いますが、本当の意味での融合に必要な調和は、違いに目をつぶって手をつなぐことではなく、積極的に違いを評価して認め合うことにあるかと思います。そのためには“寛容さ”が必要となり、その“寛容さ”を持っていれば、ゼロベースでありボーダーレスであることも、またできるものではないかと思っています。

以上思いつくままに勝手なことを申し上げましたが、若い方々には、参考になったでしょうか？ “そんな大変な世界なのか！”とかえってネガティブな印象を持つ人もいるかもしれません。しかし、正直言って、研究生活を振り返りますと、結構楽しかったし今も楽しいのです。自分にとって、このほかに道はなかったと思います。冒頭に申しましたように、自分のことを本当にやりたいことができる恵まれた数パーセントの人間だと思つづくそう思います。皆さん、人生の意義、幸福って何だと思われますか？ それにはいろいろな考え方があると思います。そのどれもが間違っているわけではなく、また厳密にどれかが正解というわけでもないと思いますが、ある人に言わせると、人生の旅の意義と幸せは、旅の目的地にたどり着くことでなく、旅そのものを楽しむことであるそうです。研究生活もまたしかり！……ではないのでしょうか？ さあ、みなさん、苦悩や悲しみを通り抜けて、ご一緒に研究生活という、このデモニッシュな旅を楽しもうではありませんか！ 三つのツールを携えて！